

INUYAMA-GAKU

広
報
誌

犬山学



犬山学ネットワーク発足記念講演会
第3回・第4回・第5回犬山学サロン開催



犬山学ネットワーク発足趣旨

犬山学研究センター長 中村 真咲

犬山学の研究を通して犬山の地域再生をめざす「犬山学ネットワーク」が発足致しました。ここで、犬山学ネットワークが発足した経緯とその趣旨につきまして、簡単に説明させていただきます。

名古屋経済大学では、これまでに地域の学術機関・企業・NPO・市民の皆様のご協力を得て実施する「体験型プロジェクト」、地域における学生のボランティア、留学生と市民の国際交流など、犬山市全体をキャンパスとする多彩な教育・研究活動を実施して参りました。

これらの経験を生かして、犬山の豊かな地域資源を活かした教育・研究プログラムをさらに開発・発展させることにより、深い地域理解を持って地域の発展と国際化のために貢献する人材を育成する「地域再生と人づくり」の拠点を構築するために、名古屋経済大学は2017年度に犬山学研究センターを設立致しました。

犬山学研究センターでは、さしあたり犬山学を「尾張・美濃・飛騨・信濃を結ぶ商業・文化・情報の結節点として繁栄した『犬山文化圏』の歴史的役割とその現代的意義を明らかにするための学際的研究手法である」と定義して、活動を開始致しました。

そして、犬山に集積する学術機関・NPO・市民団体・企業と協議し、これまでの連携協力をさらに発展させ、地域再生のための産官学連携の研究ネットワークとして「犬山学ネットワーク」を設立し、「学術都市・犬山」の基盤を構築していくことで合意致しました。

この「犬山学ネットワーク」を設立するにあたり、名古屋経済大学犬山学研究センターが事務局を務め、犬山に

所在する機関および犬山に関わる研究を行っている14機関と覚書を交換致しました。

この犬山学ネットワークでは、(1)犬山に関する最先端の研究成果の発信、(2)地域の皆様・学生が参加できる開かれたアカデミックな議論の場の提供、(3)犬山の地域資源を生かした新たな観光資源の創出、(4)中高生を対象とする高大接続の機会の提供、(5)地域における社会教育の機会の提供、などを実施していきます。

また、このような活動を実施していくために、犬山学ネットワークの運営方針として、以下の4点を暫定的に示しておきたいと考えます。

第一に、犬山学ネットワークは、参加機関による緩やかな連携組織であり、学際的な教育・研究活動を通して地域の発展や次世代の育成に貢献することを目指します。

第二に、犬山学ネットワークの事務局は、名古屋経済大学犬山学研究センターに置き、活動計画の提案、参加機関との連絡調整、広報などを行います。

第三に、犬山学ネットワークの活動を実施するにあたり、外部資金への応募や寄付金の募集も行っていく予定です。

第四に、犬山学ネットワークの活動を実施していくなかで、参加機関の若手研究者の支援や、地域の大学生・高校生の育成にもつながるような枠組みを整えていきたいと考えております。

上記の活動を実施していく上で、参加機関をはじめ、ご協力頂く皆様からご指導・ご助言を賜れば幸いです。

犬山学ネットワークに関する覚書 締結14機関

(50音順)

学校法人足立学園 愛知文教大学	公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館
特定非営利活動法人 犬山里山学研究所	公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所
公益財団法人 犬山城白帝文庫	国立大学法人 名古屋大学博物館
一般財団法人 岩田洗心館	国立大学法人 名古屋大学大学院 環境学研究科附属地震火山研究センター
国立大学法人 京都大学霊長類研究所	公益財団法人 日本モンキーセンター
特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク	公益財団法人 博物館明治村
国立大学法人 東京大学大学院 農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所	株式会社名鉄インプレス 野外民族博物館リトルワールド

理事長挨拶

学校法人市邨学園理事長 末岡 仁

本日は、犬山学ネットワーク発足記念講演会によくそお越しいただきました。主催者を代表し御礼を申し上げます。一言、本学の取り組みを含め、犬山学についてお話をさせていただきます。

名古屋経済大学ではカリキュラムの中で、学生が犬山・小牧を中心とするこの地域に実際に çıkかけて、現実のリアルな題材に挑む課題解決型の「体験型学習」を充実させてきました。

また、本学の地域連携センターを窓口にも、学科やゼミナールの活動における地域コミュニティとの関わり、また、国際交流事業への留学生の参加など、地域における教育研究活動を積み重ねて参りました。

これらの経験を通して、あらためて気づかされたことは、犬山には豊かな歴史資源・自然資源・産業資源があるということ。これらを生かした教育プログラムを作ることによって、地域に貢献できる人材を育成するべく、名古屋経済大学犬山学研究センターを2017年4月に設立いたしました。

同年10月には明治村にて「犬山学研究センター設立記念シンポジウム」を開催させていただき、犬山学のめざすべき方向について議論することができました。

それは、犬山の様々な機関と協働し、地域資源を生かした産官学連携のネットワークとして「犬山学ネットワーク」を

構築することが重要であるとして、この度14機関と合意に至ることができました。名古屋経済大学は、その事務局として犬山学ネットワークの発展に貢献していきたいと考えています。

本日は、この犬山学ネットワークの発足を記念し、講師の竹内 誠先生にお越しをいただき、「犬山学に期待するー江戸東京学の体験からー」というお題目でご講演いただきます。

犬山学ネットワークの活動を積み重ねていくことにより、「学術都市・犬山」の基盤構築につながると考えております。本日の講演が皆様にとって有意義なものになることをご祈念申し上げます。冒頭のご挨拶と致します。本日は最後までよろしくお願ひ申し上げます。



愛知県振興部観光局長挨拶

昨年度この犬山において、地域の研究機関、NPO、市民団体、行政機関、そして企業の皆さまと協力して産官学連携ネットワークを構築し、地域再生と人づくりの拠点として、名古屋経済大学を中心とした犬山学研究センターが立ち上げられました。この犬山学研究センター設立には、愛知県が平成28年度より実施いたしております、「あいち学生観光まちづくりアワード」で優秀賞となりました、名古屋経済大学の学生さんの「ジオラマジックin愛知」という提案が大きく関わったと伺っております。これを契機として、観光だけではなく犬山の新たな魅力の発掘をする、今後の活動に大いに期待をさせていただいております。



愛知県振興部観光局長
兼松 啓子

犬山市長挨拶

今のグローバル社会の中で、グローバルな視点だけで良いのかというと、そうでは無いと思います。グローバルの視点からローカルを見る、ローカルの視点からグローバルを見る、この双方向の視点があって初めて価値が生まれる、そう思っております。

この犬山学の展開の中で、人材育成や地域振興もありますが、価値の創造という点から言えば、様々な学びや気づきがあり、そこから生み出される価値に結びついていくことに、大いに期待をしております。また犬山市としても、この犬山学に対して全面的に連携をしていきたいと思っておりますので、共に犬山を盛り上げていく為に頑張っていきたいと考えております。



犬山市長
山田 拓郎

記念講演会 「犬山学に期待するー江戸東京学の体験からー」

開催日時：2018年12月4日(火) 場所：名鉄犬山ホテル 彩雲の間

自分自身が生まれ育った環境の事を知る、というのはとても大切だということを私自身の体験で分かりました。

私の父は明治17年の生まれで明治時代の話は私はずっとたくさん聞いて育ちました、さらに私の祖父は天保8年生まれです。祖父が父に伝えた江戸時代の話は、私は父からいろいろ聞かされて育ってきました。また生まれ育った地域は、江戸時代の地名や文化が色濃く残る東京の下町でしたので、子供の頃から私の頭の中では江戸時代は身近な感覚で、そんなに遠い昔の話では無いという意識がありました。

そういった経緯もあり、いつの間にか江戸時代について勉強しよう、江戸時代の中でも自分が育った東京の前身である江戸の町の研究をしようと思ったわけです。

結果的にそれが、江戸東京博物館の仕事をお手伝いする事に繋がっていきました。

江戸に関する研究と、東京に関する研究は従来から盛んにされてきましたが、江戸と東京はそもそも同じ場所であり、時系列で繋がっているわけです。江戸と東京という時代別の研究だけでなく、時代の移り変わり、繋がりの部分でどんな取捨選択がされてきたか、連続と非連続というテーマも研究しなければ意味がない。それで江戸東京学が誕生したのです。この江戸東京学というのは、縦と横の制限無く自由に研究する方法をしめたものです。

つまり、江戸から東京への縦の時系列の制限も無く、他の研究機関、分野などの横の制限も無いという意味であり、その方法論を提唱している学問なのです。

江戸学とか江戸東京学はいずれも1980年代には成立しました。いま世に盛んな「〇〇学」という地域学の走りと言えましょう。当時刊行された江戸学事典と江戸東京学事典の編者は、歴史学のみならず建築学、社会学、文学、民俗学などの様々な分野の研究者が集まっています。そしてこの江戸学事典と江戸東京学事典の2つが、1998年開館の江戸東京博物館の基本的な学問的根拠となっています。

またこの江戸東京博物館は、体感型博物館となっています。これは歴史や学問を論文などで報告する場ではなく、一般の方にも分かりやすいように、楽しんで学んで頂けるような博物館にしたい、との思いで体感型の博物館を作りました。この博物館を運営してきたなかでも様々な学びがありました。

ある大手不動産会社から、日本橋に新しい街づくりをしたいとの相談を受けました。この時に江戸時代の町づくりから学んだ事を活かしました。一つは道路を中心とした両

側町の町づくり。また夜間人口のある町づくりとして、ビジネス街など、昼間は人がいますが、夜になると誰も居なくなることがないように、テナントだけでは無くマンションも作るようにしました。そして、百貨店と森や神社が隣接して存在する町、信仰と娯楽が融合する町づくりをしました。これらは江戸から学んだことであり、歴史というのは古いものですが、現在に活かせることはたくさんあると思いました。それと同様に、この犬山でも現代に活かせる歴史がたくさんあると思います。



最後になりますが、犬山学についても大切なことは、研究者と市民が一緒に関わるという事。研究成果に関しては必ず、社会還元しなければならないという事です。また様々な研究分野が交流し学際的であることも大切です。

そして教育普及とあって、小中高校との連携。そして犬山学をどう創生させるか、発展させて行くかを絶えず考えていかなくてはなりません。かつての郷土史は自分達が一番だという、偏屈傲慢なローカルイズムでありましたが、決してそうではなく、比較の中で発展性を持つような地域学であって欲しいと思っています。つまり地域の個性に普遍性を持たせるということです。

その為に、この地域学というものは、研究者だけが集まるだけでは無く、企業や市民、自治体が集まる事で成り立つものであり、それが一番大切なことだと思います。



講師プロフィール

(公財)徳川黎明会 徳川林政史研究所 所長
竹内 誠

東京教育大学大学院修了、文学博士。専門は江戸文化史・近世都市史。信州大学助教授、東京学芸大学教授、東京都江戸東京博物館館長などを経て、現在は徳川林政史研究所所長、東京学芸大学名誉教授、東京都江戸東京博物館名誉館長、日本博物館協会顧問など。数多くの著書のほか、NHK大河ドラマ・金曜時代劇などの時代考証を担当し、平成28年に第67回日本放送協会(NHK)放送文化賞を受賞。

第3回犬山学サロン 名水の里のビール工房 ～盛田金しゃちビール物語～ 「モノ造りにかける100年の想い」

開催日時:2018年10月2日(火) 16:30～18:00 場所:名古屋経済大学 3A2講義室

「地ビール(クラフトビール)」が誕生し25年が経ちますが、現在は、その存在を国内外に示し続け、中には年間製造量2000 klに迫る勢いのメーカーも存在。また、ビール本来の持つ楽しさ、多様性に魅了され、新規参入する人たちもいます。このような中で、私たち盛田金しゃちビール(株)のルーツをお話したいと思います。

私たちがビール製造を開始したのは1996年ですが、この歴史を語る上で、盛田家11代久左衛門、命祺(めいき)翁の存在を抜きにはできません。既に1665年から現在の常滑市小鈴谷(こすがや)で酒造を生業としていた盛田家に在って、明治初期より豆味噌や醤油などの製造を開始、また地域のため私財を投げうって学校、郵便局をつくり、さらには当時国内有数といわれた規模のワイン用ブドウ畑を開墾する等、地元にも多大な貢献をした人物であり、彼が明治十年代後半に試醸した「三ツ星ビール」という名のビールが私たちが金しゃちビールのルーツです。しかし、このビール醸造は、当時世界規模で蔓延したぶどう害虫「フィロキセラ」によってブドウ畑が壊滅した影響で一度潰れてしまいます。ただ、夢をあきらめきれない命祺は、分家筋に当たる盛田善平(後の敷島製パン(株)の創業者)にこれを委ねることにします。善平は、縁戚筋の中塾家と協力し、丸三麦酒(株)を設立し「カブトビール」を発売。その後、事業は拡大し、1933年には大日本麦酒と合併という歴史を歩んでいくことになります。残念ながら終戦後の財閥解体により、日本麦酒(株)(現サッポロビール(株))と朝日麦酒(株)(現アサヒビール(株))に解体され、その後はビール醸造に携わることはありませんでした。



カブトビール資料表紙

そこで、現代、この命祺翁が成し得なかった夢を受け継いだのが、現オーナー盛田和昭です。和昭の実兄はソニー(株)創業者の「盛田昭夫」であり、昭夫は本来当主として盛田家の家業を継ぐべき立場でしたが、家業を弟の和昭に一任しソニーを上げたのです。一方、和昭は家業を守り発展させ、先にワインメーカー盛田甲州ワイナリー(株)も立上げています。

私たちがビール事業を進めるにあたり特にこだわった

のが、「安定した高品質な美味しいビールを造り続けること」でした。そこで、設備選定はもちろん、ビール醸造に必要な豊富な水がある場所として、ここ犬山の地を選びました。醸造には敷地内の井水を使用しており年間を通じて安定した品質の水が確保できるのは、大変好ましいことです。

実は「金しゃちビール」の名前が大きく露出し、転機になったのは、2005年に開催した「愛・地球博(愛知万博)」と、地域密着、地元特産品という切り口で開発を進めてきた「名古屋赤味噌ラガー」です。その名の通り、原料の一部に愛知県特産の「豆味噌」を使用した商品ですが、当時は特に営業サイドからの風あたりは強く、「こんなもの造りがあって」と言われることもありましたが、愛知万博が始まり、マスコミに取り上げられると、予定数が数日で完売、一方で当初販売に反対した人達が「なぜもっと造っていないんだ?」となる始末で、この商品を通じて人生勉強させて頂きました。その後のビールのコンペティションでも数々の受賞を積み重ね、「金しゃちビール」は認知されてきました。そして2014年には「ミツボシビール」ブランドを発売、全国へ展開も進めています。



工場仕込み設備

このように、祖先の100年来の夢を成し得てきましたが、「盛田久左衛門命祺」、「盛田善平」、「盛田昭夫」を代表する、この脈々と流れるモノづくりのDNAを継承し、次へ伝えていくことが私たちの使命であり、存在意義ではないかと考える次第です。

1) 二宮隆雄:情熱の気風, p. 163, 中部経済新聞社 (2004) .



講師プロフィール

盛田金しゃちビール(株) 取締役 工場長 山口 司

1995年3月	山梨大学大学院化学生物工学科修士課程修了
1995年4月	盛田株式会社入社 清酒部配属
同 5月	地ビール事業参入に向けた立ち上げ準備メンバー兼任となる
1996年1月	ランドビール株式会社 創業
1996年9月	ランドビール株式会社(現 盛田金しゃちビール株式会社)に正式に転籍
2016年4月	取締役 工場長就任 現在に至る

第4回犬山学サロン 「犬山の商業史」

開催日時:2018年11月20日(火) 16:30~18:00

場所:名古屋経済大学 3A2講義室

「みやこや」は曾祖父が明治10年犬山市に店舗を構えたのが始まりです。父が3代目に就きましたが、昭和19年に戦死。母が3代目に就任しました。私は高校を卒業後就職していた呉服問屋を退職し、昭和38年に継ぎました。

その当時の犬山城下町では、3と8が付く日に三八市が盛大に開催される等、戦後物が無い頃は犬山に商店街が集中していました。

私の記憶では、露天商が百軒くらい出店していたと記憶しています。開催日は身動きとれないほどの混雑で、出店したお店のほとんどが完売の様子で何を売っても売ってしまう状況でした。

その後自動車の普及に伴い、道路を使って物を売ることに對し道路交通法が厳しくなりました。

そんな中、犬山駅前にユニーが進出し、経営する「みやこや」もお客様に少しでも近づこうということで、「みやこや」をユニーのテナント内に入り営業を開始しました。

その後、出店規模を拡大し、「みやこや」はピーク時には9店舗と「エドヤ」で23店舗がショッピングセンターに入り店舗営業するなど、店舗展開を急速に行いました。



創業地である旧本店

その後、昭和63年6月犬山市にイトーヨーカドーを誘致しました。その際には大型店反対という意見が根強くありました。

当時の法律は、売り場面積を一定値以内とし増やさないと規制がありました。

そのイトーヨーカドーも平成29年撤退し、現在はヨシヤマが営業しています。

以前、犬山城前の通りはシャッター通りでした。私はその状況を見て、このままでいけないと思いました。しかし、どうやったら活性化できるか。今の時代、昔のようないわゆる商店街に戻すことは不可能だと思ったのです。



三八市の様子

そのため、全く違った切り口から城下町の再生を図りたいと考え、イギリスで発達したタウンマネージメントオーガニゼーション(「まち」を一体的・総合的に「管理・運営」していく)という街の活性化をする仕組みを取り入れて、まちづくりを行う犬山まちづくり株式会社を十数年前に設

立しました。

まずは家主・地主から建物を借上げないといけないのですが、所有者を訪問し「ちょっと貸してください」と頼むだけでは誰も貸してくれません。しかし住民の方々は私の顔見知りの人たちばかりです。

それで、借り上げた建物を改装しテナント募集を掛ける。そうしたところ、次々とシャッターが開いていきました。

しかしながら現在を振り返ると今は大型店受難の時代ですね。いわゆるGMSの受難の時代。それは実はネットの出現だったのです。いよいよネットの総売上がショッピングセンターの総売上を超える時代なんです。ショッピングセンターというものの終焉なのかなとも。

名古屋経済大学でスタートした「犬山学」は犬山を深堀するという事ですから、私はその趣旨に大賛成です。犬山の商業がこれからどうあるべきかを研究する等未来に対しても深堀をしていかなければなりません。

私の願いは、「千年後の地球は国境のない星」というものです。もちろん千年後生きていませんが。

大変雑駁な話でしたが、ご清聴誠にありがとうございました。



講師プロフィール

大山商工会議所 会頭 日比野 良太郎

- 昭和35年3月 滝実業高等学校普通科卒業
- 昭和35年4月 中村合資会社勤務
- 昭和38年4月 合資会社みやこや(現 株式会社みやこや)入社
- 昭和50年8月 都商事株式会社を設立 代表取締役社長に就任
- 平成6年6月 株式会社みやこや 代表取締役に就任

- 大山商工会議所 役員
- 平成4年4月~ 常議員・2号議員
- 平成10年4月~ 副会頭
- 平成22年11月~ 会頭(3期目)第4代会頭

第5回犬山学サロン 「成瀬家に伝来した藤原定家小倉色紙をめぐる」

開催日時:2019年1月22日(火) 16:30~18:00 場所:名古屋経済大学 3A2講義室

成瀬家は初代の^{まさなり}正成(1567~1625)以来、明治維新時の9代^{まさみつ}正肥(1835~1903)まで、尾張徳川家の筆頭家老としての政務に携わった家柄で、明治維新後、正肥は犬山藩主となり尾張藩から独立。翌明治2年(1869)に版籍奉還により犬山藩知事、明治4年の廃藩置県で犬山藩は犬山県となり、同年11月22日に名古屋県に合併。明治17年の華族令が制定されたことにより正肥は男爵、明治24年には子爵に陞爵しました。

成瀬家に伝来してきた国宝の犬山城(昭和10年国宝指定)をはじめ、伝来の什宝・記録古文書類は、平成16年(2004)に財団法人白帝文庫(平成25年より公益財団法人)を設立して成瀬家から寄贈されています。

成瀬家に伝来した什宝類の中で取り分け有名な「長篠・小牧長久手合戦図屏風」のうち左隻の「小牧長久手合戦図屏風」には初代正成初陣の勇士が2箇所描かれ、この戦いの際に徳川家康(1543~1616)から敵の首級をあげた正成に下賜された「短刀 銘 本明備州長船兼光」や羽柴(豊臣)秀吉(1537~98)が犬山で使用したとされる菊桐文の高台寺蒔絵を施した「風呂呂道具」や「鎧櫃」、さらに正成が家康から拝領した「黒塗箏琴柱蒔絵鞍」など、犬山における成瀬家の歴史を物語る品々が数多く残されています。

今回このサロンで取り上げた「藤原定家小倉色紙」もその一つです。「小倉色紙」の名は、藤原定家(1162~1241)が嵯峨小倉山に営んだ山荘の障子に押されていた百人一首の色紙形であったことに由来するとされています。定家の日記『^{めいげつき}明月記』文暦二年(1235)5月27日条に、宇都宮蓮生(頼綱 1172~1259)の懇望により、天智天皇から家隆・雅経に至る古来の歌人の和歌各一首を選定して染筆したとする記事があり、これが「小倉色紙」に相当するとされてきました。この定家の色紙が記録に登場するのは、室町時代後期

以降で、三条西実隆(1455~1537)の日記『実隆公記』の延徳2年(1490)3月27日条に連歌師である飯尾宗祇(1421~1502)が「定家卿色紙一枚恵之、秘蔵々々」とあるのが初出で、以後同年11月29日条、永正9年(1512)6月17日条などに記載されています。その後茶の湯の盛行にとも

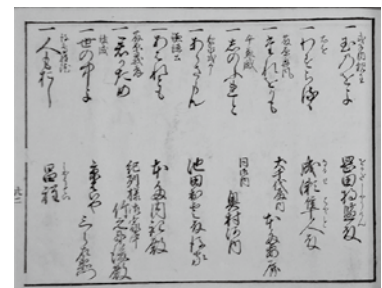
ない、『^{そうぎやう}宗及茶湯日記』や『^{そうたん}宗湛日記』をはじめとする茶会記に「定家ノ色紙」の名が頻繁に登場するようになりました。以後江戸時代を通じ定家の「小倉色紙」や歌書は、有力大名にとっては欠くべからざる道具の一つとなり、また最上の贈答品のひとつとして重んじられてきました。

徳川将軍家と諸大名や茶人たちが所有していた茶入や茶碗、掛物などの名物道具を器種別に掲載した『^{がんかめいぶつき}玩貨名物記』(序文に万治3年<1660>4月の年紀)には茶入や掛物と同様に「定家卿小倉色紙記」とする項目をあげ28枚の「小倉色紙」とその所蔵先を明記しています。その中に「一右近わすらるゝ 成瀬隼人殿」と成瀬家に伝来する「小倉色紙」が掲載されています。

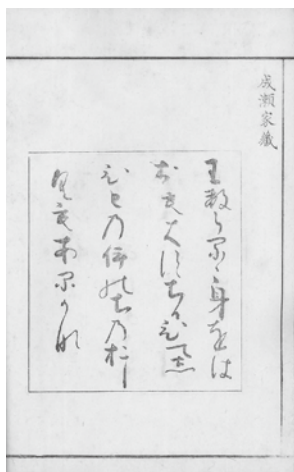
ところで、『玩貨名物記』には「小倉色紙」のほか、茶入の項に「ろてい」、掛物の項に「牧谿自画自賛」三幅一対が成瀬隼人所蔵として掲げられています。「ろてい」は、唐物の驢蹄茶入を指し、口造りが文字通り驢馬の蹄を逆にした形をしているので名付けられた茶入です。また「牧谿自画自賛」三幅一対は、牧谿となつていますが、無準師範(1177~1249)自画自賛の作品による三幅対として伝来し、各幅に「道有」の朱文重廓方印が捺されているところから、足利三代将軍義満(1358~1408)の旧蔵品であることが判明します。

『玩貨名物記』に記載されたこれらの3点の作品は、成瀬家の大名に匹敵する家格を示すための最上の道具でした。

残念ながら白帝文庫開設以来、これらの3点の作品が同時に展示されたことなく、近い将来、犬山の地元の皆さんのみならず、多くの方々にご覧戴く機会が設けられればと思っています。



「玩貨名物記」の「定家卿小倉色紙記」の頁



「集古十種」所蔵の成瀬家伝来「小倉色紙」



講師プロフィール

(公財)徳川黎明会 徳川美術館 学芸部長

四辻 秀紀

大谷大学文学部国史学科卒業後元興寺文化財研究所、徳川美術館学芸員を経て現職。専門は日本美術史(古代中世絵画史、かな古筆・料紙装飾史)

これまでに「源氏物語絵巻と王朝人の美意識」「かな~王朝のみやび~」「国宝源氏物語絵巻」「国宝紫式部日記絵巻と雅びの世界」「よみがえる源氏物語絵巻」などの特別展を企画。

主な著作に「徳川美術館所蔵 古墨」(しこうしゃ)「源氏物語を学ぶ人たちに」(共著:世界思想社)「源氏物語絵巻」(二玄社)「国宝源氏物語絵巻」(共著 中央公論美術出版)など。

犬山学ネットワーク情報交換会

開催日時:2018年12月4日(火) 場所:名鉄犬山ホテル 彩雲の間

2018年12月4日(火)に開催いたしました、犬山学ネットワーク発足記念講演会の終了後、ネットワーク締結機関の皆様やご来賓の皆様で集合写真を撮影いたしました。

その後は会場を移動し、情報交換会が開催され、犬山学研究センター顧問でもある犬山商工会議所 日比野会頭の勢いのある乾杯のご発声とともに、和やかな雰囲気での情報交換が行われました。

犬山学ネットワークは、犬山に集積する学術機関・

NPO・市民団体・企業が参加する地域再生のための産官学連携の研究ネットワークとして設立されました。

そのため、参加機関の関係者が集まり、所属機関の枠を越えて意見交換・情報交換を行うことによって問題意識を共有し、今後の犬山学ネットワークや各機関の活動に反映させていくことが重要です。

今回の情報交換会は、まさにそのような所属機関の壁を越えて問題意識を共有する機会になったと考えています。



犬山学ネットワーク発足記念講演会にご参加いただいた皆様の声

犬山学ネットワーク発足記念講演会にご参加いただきました皆様の声をお届けします。(抜粋)

- ◆ 犬山学のねらいと地理的なスケールが分かった。
- ◆ 博物館の理想とする姿について理解を深めることができた。
- ◆ 学問知識だけでなく、体感的知識があり、講演内容に深みがあった。
- ◆ 江戸東京学の成り立ちについて興味深く伺うことが出来た。
- ◆ 感動させる研究に繋がる方法論が示された。犬山学もそうした取り組みを行ってほしい。
- ◆ 犬山においても昔の歴史から今後の犬山のまちづくりに活かすことができる事例が多いと思う。大変参考になった。
- ◆ 今までの名経大は学生が街へ出て市民と交流することがメインだったが、今後は今まで以上にアカデミックな交流が増えることを期待する。更に「犬山学」が地域の魅力再発見につながり、地域の課題解決につながる「社会教育」に育つことを期待する。

※今後の活動につきましては、本学ホームページにてご案内いたします。

広報誌「犬山学」 第4号

発行日:2019年2月22日

発行:名古屋経済大学 犬山学研究センター

〒484-8504 愛知県犬山市内久保61-1

TEL:0568-68-3282 FAX:0568-67-0724

MAIL:inuyamagaku-c@nagoya-ku.ac.jp

筆文字:犬山城白帝文庫 理事長 成瀬淳子